

1 予報（9月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
さび病	-	やや少	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並だった。(±) (2) 9月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並の予報。(一)
べと病	-	やや多	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(＋) (2) 9月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並の予報。(一)
黒斑病・葉枯病	-	多	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(＋) (2) 9月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
ネギコガ	-	やや少	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。(－) (2) 9月の気温は平年より高い予報。(＋)
ネギハモグリバエ	-	並	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや低かった。(一) (2) 9月の気温は平年より高い予報。(＋)
ネギアザミウマ	-	並	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや低かった。(一) (2) 9月の気温は平年より高い予報。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(一)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

〇べと病、黒斑病・葉枯病の発生が広く見られているため、発生状況に応じた防除に努めること。(令和6年8月8日発表、農作物病害虫防除速報 No. 12)

【共通事項】

- (1) 収穫期が近い作型では、使用時期（収穫前日数）に特に注意して薬剤を選択する。
- (2) 気温が低下すると各種病害の発生が多くなるので、散布間隔が空かないように定期的な防除に努める。
- (3) 同一系統の薬剤を連用せず、系統の異なる薬剤によるローテーション散布を行う。
- (4) 茎葉散布は散布ムラが生じないように畝の両側から丁寧に行う。
- (5) 圃場内及び周辺の雑草除去に努める。

【さび病、べと病】

- (1) 気温が低下すると発病が多くなるため、定期的な防除を継続する。
- (2) 降雨が続くと発生が増加するので、薬剤散布は降雨前に行う。
- (3) 多発すると防除が困難となるため、予防散布に努め、発生がみられた場合には、効果の高い薬剤を散布する。
- (4) 病斑には葉枯病（褐色斑点病斑、黄色斑紋病斑）が二次的に感染するため、予防散布に努める。

【黒斑病・葉枯病（褐色斑点病斑、黄色斑紋病斑）】

- (1) 秋冬ねぎでは、黄色斑紋病斑（図1左）の発生が9月頃から増加するため、9月上旬～10月上旬までは10日間隔で効果の高い薬剤（テーク水和剤、アミスター20フロアブル、ダコニール1000）を輪番で4回散布する。
- (2) さび病やべと病の病斑に二次的に感染するため、これらの病害にも効果のある薬剤を選択する。



図1 葉枯病の病斑
(左：褐色斑点病斑、 右：黄色斑紋病斑)

【ネギコガ】

(1) 圃場をよく観察し、発生状況に応じて防除を実施する。

【ネギハモグリバエ】

(1) 圃場をよく観察し、被害の早期発見に努め、被害が確認された場合は薬剤散布を行う。

【ネギアザミウマ】

(1) 定期的な防除を実施し、密度低下を図る。

(2) 高温条件下では世代の経過が早いため（25℃では16～17日程度で1世代経過）、散布間隔が空かないよう注意する。

(3) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤でローテーション散布を行う。